

➕ 眼鏡店での検査は「見え方」を重視

眼鏡店での検査は、眼科での方法と内容と目的が異なります。あくまで眼鏡を選ぶための検査なので、「見え方」に比重をおいた方法がとられるのです。

ここからは、眼鏡の選び方について説明しましょう。

基本的には視力検査だけを行って眼鏡を処方するといった方法が多いようですが、それだけではその人に合った眼鏡を処方できるわけではありません。生活スタイルや仕事内容、眼鏡・コンタクトレンズでどんな作業をしたいのかを、担当の方に相談することが必要です。

眼鏡をつくるときに受ける検査は、以下のとおりです。

① 瞳孔間距離 (P.D. : pupilio distance) の測定

両眼の間の距離を測定します。男性の平均は64ミリ、女性の平均は60ミリです。レンズの中心と瞳孔の位置がずれると、視界がぼやけることがあります。

② 裸眼視力検査

眼鏡やコンタクトレンズを使わずに、ランドルト氏環やひらがな、数字などの指標を用いて視力を測定します。基本的には遠見視力を調べますが、場合によっては近見視力も測定します。

③ フォロプターに度数を入れたの検査

②の結果から必要と想定した度数を入れたレンズをフォロプターという機械をセットして、その状態での見え具合を検査します。

このとき、赤色と緑色の2種類の背景に黒字で書かれた文字や記号を見て、どちらの背景のほうが文字や記号がはっきり見えるかを調べます。「赤い背景のほうが字をはっきり読める」という場合は近視気味、つまりレンズの度数が足りていない可能性があります。逆に「緑の背景のほうがはっきり読める」という場合は遠視気

味、つまりレンズの度数が過多の状態です。同時に乱視の検査も行います。

④ 調節力検査

見たいものにピントを合わせる力、すなわち調節力がどのくらいあるかを調べます。対象物を近づけ、どのように見えるかがポイントとなります。

通常の眼鏡店は①から③の検査だけを行うことが多いのですが、近方視の負担や老眼が増えている現代にあっては、④の調節力検査がきわめて重要です。④の検査からは、調節力や老眼の進行具合がわかります。

検査が終わったら、近視であれば遠くを見たときに網膜に完全にピントが合っている状態、すなわち完全矯正の状態より度数をやや下げたレンズを装着します。完全矯正の度で眼鏡を作ると、遠くまでよく見えても手元が見えづらい場合があるためです。また、見えすぎることによって目が疲れて頭痛がするなど、眼以外の体の不調を招く恐れもあります。レンズの度数は少し下げて、自分の調節力の使用量を軽減するというのが、眼を疲れさせない方法です。

夕方に検眼を行ったり、午前中だとしても寝不足などで眼がベストな状態ではなかったりすれば、本来の視力より低い検査結果が出ます。通常より調節力が低い状態での検査結果で完全矯正すると過矯正となり、眼に合わない眼鏡になってしまうのです。

検眼ではいろいろな機械を使いますが、機械検査の結果だけでは、正しい眼鏡になりません。遠方視力を検査するオートレフラクトメーターは、実際には見る対象が目のすぐ前にあるわけで、その心理的影響が眼の調節機能に働きかけてしまうこともあるからです。その人の年齢や性別も十分に加味しなければなりません。

眼鏡やコンタクトレンズを処方するときには、機械だけでその人の眼の状態を測るのではなく、問診などを行ってその人のニーズや生活環境を聞き、それを加味して処方する必要があります。マニュアルどおりの検眼作業では、その人に合った眼鏡・コンタクトレンズをつくることはできないのです。

これは、考えてみれば当たり前のことです。靴や服を既製品で買うのではなく仕立てる人も多いと思いますが、眼鏡やコンタクトのレンズというのは、そのつど一人ひとりの目の状態に合わせて仕立てるべきものです。どんなに質のよいメーカーのレンズであっても、その人の眼の状態にきちんと合わせなければ、サイズの違う服や靴を履いているのと同じ状態になってしまいます。その意味で、眼鏡やコンタクトをつくる場合は、マニュアルどおりの機械任せの検眼作業は、極力避けた方がよいと思います。

POINT

眼鏡店で眼鏡をつくるときには、視力検査の結果だけに頼ってはいけない